

## 二〇一七年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

### 第3問 古文 『木草物語』

#### 〔出典〕

『木草物語』は、江戸時代中期の女性歌人である宮部万みやべまん（？～一七八八）によって書かれた長編の擬古物語（平安時代の物語を模して書かれた物語）である。作家・作品ともに知名度は高くなく、受験生が文学史的に知っておかなければならない作家・作品というわけではない。擬古物語とえば、一般的には鎌倉時代成立の作品が多いが、これまでに東進の「センター試験本番レベル模試」でも出題されてきたように、本居宣長の『手枕』、荒木田麗女の諸作など江戸時代の国学者や歌人の手による作品もいくつかある。宮部万は、高崎藩（現在の群馬県高崎地方）の藩士浅井直方の娘で、同藩士で国学者であった宮部義正に嫁した。義正が幕府の和学所「国学研究所」に仕えることとなり（将軍家師範となる）、万は江戸に同行、江戸にて、公卿で堂上（昇殿が許されていること）歌壇の中心人物であった冷泉為村（冷泉家中興の歌人。門人に小沢廬庵おざわろあんなどがある）や、同じく公卿で、幕府で国史の進講（貴人に対する講義）を務めていた烏丸光胤からすまるみつたねなどに和歌や学問を学ぶようになる。歌集に『万女詠草』、夫義正との共詠家集に『相生乃言葉』などがあり、和歌以外では、『源氏物語』の葵の巻を書き写すなどしている。

今回出題されたのは、貴公子（菊君）が美しい女性（若い尼）を垣間見て恋に落ちるといふ場面であるが、これは古典文学では典型的と言える恋の始まりの場面である。男が送った手紙（和歌）が相手の女や女の代理人によって一度は拒否されるといふのも一つのパターンである。このような擬古物語に見られる「型」の大もとは『源氏物語』であると言え、一方、作中人物が詠んでいる和歌（実際には作者が詠んでいる）に不自然さがないことを見ると、『木草物語』は、国学や和歌を学び、『源氏物語』を書写した人であるからこそ書けた著作であると言えよう。

近年のセンター試験本試験の古文の問題は、昨年度（二〇一六年）の『今昔物語集』（説話集）のような例外もあるが、多くは、平安時代の物語・鎌倉時代の擬古物語・江戸時代の仮名草子など物語（小説）類からの出題であり、その点では今年もその傾向からはずれなかったと言える。

#### 〔通釈〕

急なことなので、主「蔵人」は「十分なおもてなしもできず、畏れ多い（菊君の）お出ましであるよ」と、（こゆるぎの磯の「いそ」ではないが）急

いで、酒のさかなを求めて、御供の人々も（菊君を）もてなそうと騒ぐが、菊君は「涼しいほうに」と言って部屋の端近くに寄って横になり、くつろいでいらっしやる。その御様子は、場所がらもあり、（普段にも）ましてまたとないほどに素晴らしく見えなされる。

隣（の家）と言ってもたいそう近く、ちよつとした透垣などを設け渡してあるのだが、夕顔の花が所狭しと咲いているのが、見慣れなさらないけれども美しいと思つて（菊君は）御覧になる。だんだんと日が暮れはじめ（夕日の明かりをたたえた夕顔の上の）露の光（の輝き）が（夕闇に）まぎれる様子もないので、（菊君は庭に）下り立つてこの（夕顔の）花を一房折り取りなされたが、その時に、透垣の少し（隙間が）空いたところから（隣を）覗きなされる。すると、尼の住まいと思われて、閨伽棚にちよつとした草の花などを摘んで散らしてあつたが、五十歳くらいの尼が出て来て、水で清めたりしている。花皿に数珠が押しやられて、さらさらと鳴っているのもたいそうしみじみとするが、また奥のほうからうつつすらいざり出て来る人がいる（のが見えた）。年のころは、二十歳くらいと思われて、たいそう色白で小柄であるが、髪の間が、座っている（その人の）腰のあたりくらいにふさふさと広がっているのは、これも尼であろうか、たそがれ時でほんやりとしか見えず、はつきりとはおわかりにならない。片手にお経を持っているが、何であろうか、こちらにいる老いた尼にささやいて微笑んでいるのも、このような葎の中「質素な住みか」には不釣り合いなほど、高貴でかわいらしい様子である。たいそう若いのに、どれほどの発心をしてこのように俗世を捨てて出家してしまつているのだらうと、（菊君は）つまらないことに御心がとまる癖があるので、（この若い尼のことを）たいそうしみじみと見過ごしがたくお思いになる。

主は、御果物などを（菊君に差し上げるのに）ふさわしい様子にして持つて出て、「せめてこれを」と、準備して騒ぐが、（菊君はお部屋に）お入りになつても（果物には）見向きもなさらない。（菊君は）「たいそうしみじみと心ひかれる人を見てしまったものだよ、（俗人と交渉を断っている尼であるから無理やり押しかけて逢うこともできないが）尼でなかったら、逢わずにすますことはできそうにない」というお気持ちが出て、（周囲に）人がいないときに御前にお仕えする少年にお尋ねになる。「この家の隣に住む人はどのような人か。知っているか」と（菊君が）おっしゃると、（少年は）「主のきょうだいである尼と申します者が、数カ月来山里に住んでおりましたが、近頃突然こちらへ出て来て（おりました）、菊君様がこのように急においでになつた時に、折の悪いことだと、主はたいそうわずらわしいことに思つております」と申し上げる。「その尼は、歳はいくつぐらいであろうか」と、さらに（菊君が）お尋ねになると、（少年は）「その人は）五十歳過ぎにもなるでしょうか。娘でたいそう若い人も、（母親と）同様に俗世を捨てて出家して、とうかがいましたのは、本当でしょうか。その身の上のわりにはいやしげなところはなく、（仏道に対して）この上なく気位が高い人であるために、ほとんどこの世を嫌に思つて（出家して）しまつたとか言うことです。本当に仏に仕える気位の高さはたいそうなものです」と言つて笑う。「しみじみとすることであるよ。それほど悟つたという人に、無常なこの世についての話も申し上げたい気持ちがあるが、突然のとりとめない話も罪深いけれど、（彼女は）どのように言うだらうか、試しに手紙を渡してくれないか」とおっしゃつて、御畳紙に（書いた和歌は）、

「露かかる…」（涙のような）露が降りかかる心もはかなくとりとめない。たそがれ時にほのかに見た家に咲く花である夕顔（のような美しいあな

た)よ」

少年は(菊君の真意が)よくわからず、何かわけがあるのだろうと思って、(手紙を)懐に入れて(隣の家へ)出かけた。

(菊君は)その後もぼんやりと物思いにふけていらっしやるが、人々が、御前に参上し、主も「退屈でいらっしやいましょう」と言っていて、いろいろとお話などを申し上げるうちに、夜もたいそう更けていくので、菊君は例の(手紙の)御返事がたいそう見たいが、あいにくな人の多さをつらくお思いになるので、眠たそうに振る舞いなさって部屋の端に寄って横におなりになると、人々は、(菊君の)御前で『さあ、早くお休みください』と言って、主も部屋の奥へすべるようにさっと入った。

やっと(隣へ使いに行った)少年が帰って参りましたので、(菊君が)「どうだったか」とお尋ねになると、(少年は)「『ここには)まったくこのような御手紙をいただくはずの人もおりません。場所間違えではないでしょうか』と、あの老尼は、思いがけないことのように申しました」と言っていて、(さらに)『世をそむく…』(我が家は)俗世を捨てて(出家した者が住んで)いる律の生い茂った家で粗末な家であるのに、どのような夕顔の花を見たというのですか。(あなたが見たという女性などここにはおりません。)

このように申し上げてください』と言って、(老尼が)不審がりましたので、帰って参りました」と申し上げると、甲斐のないことではあるけれども、(突然の手紙では)もつともなことだとも(菊君は)思い返しなさるが、寝ることがおできにならない。不思議なことに、(隣家の若い尼の)かわいらしかった姿が、夢ではない(現実として)御枕元じつと寄り添っているお気持ちが出て、「間近けれども『人知れず想いを寄せる人が間近にいるのに逢う手立てもない』」と(菊君は)一人つぶやきなさる。

【解説】

問1 解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、前書きなどや前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 標準

「にげなきまで」の解釈として最も適当なものを選べ。

「にげなき／まで」と単語分けされる。「まで」については、すべての選択肢が「ほど」で共通している。「にげなき」は、「釣り合わない・ふさわし

くない・似合わない」などと訳す形容詞「にげなし（似げなし）」の連体形である。よって、**正解は③**「釣り合わないほど」しかない。  
 単純な単語の意味の問題だが、「にげなし」はやや難しいレベルと言えるかも知れない。しかし、直前の「かかる葎の中には（＝このような質素な住みかには）」と、直後の「あてにらうたげなり（＝高貴でかわいらしい様子である）」とのつながり具合から考えても、最もスムーズに意味が通るのは**③**である。

(イ) 基礎

「聞こえまほしき」の解釈として最も適当なものを選べ。

「聞こえ／まほしき」と単語分けされる。「まほしき」は、希望（～したい・～してほしい）の助動詞「まほし」の連体形だが、これに関してはいずれの選択肢にも誤りはなくこれも単純な単語一語の意味の問題である。「聞こえ」は、ヤ行下二段活用動詞「聞く」の未然形。「聞くゆ」は、一般動詞として「聞こえる・噂される・聞いて」わかる」、謙譲の本動詞として「申し上げる」、謙譲の補助動詞として「おく申し上げる・おくする」と訳す動詞。これだけでも正しいのは**③**のみである。「聞くゆ」には、「聞く」**②**や「うかがう」**①**・「聞く」の謙譲表現）や「話し合う」**⑤**の意はなく、「話す」**④**なら動作的には間違いはないが謙譲の意がない。  
 よって、**正解は③**である。

(ウ) 標準

「あやしう」の解釈として最も適当なものを選べ。

「あやしう」は、形容詞「あやし」の連用形「あやしく」の語尾がウ音便化した状態。「あやし」は、「怪（奇・異）し」であれば、現代語の「あやしい」と同様に、「不思議だ」「疑わしい・不審だ」とか、「異常だ・並々でない」「けしからぬ・ふつごうだ」の意味も示すが、「賤し」であれば、「みすばらしい・粗末だ」（主に物に対して使う場合）・「身分が低い・卑しい」（主に人物に対して使う場合）という意味も示す形容詞である。単語の意味から見ると**⑤**以外は大きな誤りがなく、文意に当てはまる訳を考えなくてはならないことになる。直後を見ると「らうたかりし面影の、夢ならぬ御枕上につと添ひたる御心地して」と書かれている。「あやしう」が直後の「らうたかりし（かわいらしかった）」に係っていると見ると、**④**が「不思議なほど」となっていれば意味が通るがそうはなっておらず、選択肢の中に意味が通るものはない。「あやしう」は「夢ならぬ御枕上につと添ひた

る御心地して」に係っているのである。そう見ると、意味が通るのは④の「不思議なことに」しかない。この部分は「隣家の若い尼の）かわいらしかった姿が、夢ではない（現実として）御枕元にじっと寄り添っているお気持ちが出て」という意味であるから、そのようなことがあるはずもないにまざまざとそう思うのが「あやし（不思議だ）」と言っているのである。

よって、正解は④である。基礎的単語に関する問題だが、前後の文意を見て判断する必要がある問題である。

- 正解 (ア)  21  22  23  24  
 (イ)  21  22  23  24  
 (ウ)  21  22  23  24  
 (エ)  21  22  23  24

問2 文法（助動詞の意味）の問題 基礎

波線部 a～e の助動詞を、意味によって三つに分けると、どのようになるか。その組合せとして最も適当なものを選び。

波線部 a～e のうち、a・c・e は「ぬ」、d は「ね」であるが、助動詞でこれらのかたちになるのは次の通り。

- ぬ  
 未然形＋ぬ || 打消の助動詞「ず」の連体形  
 連用形＋ぬ || 完了（強意）の助動詞「ぬ」の終止形
- ね  
 未然形＋ね || 打消の助動詞「ず」の已然形  
 連用形＋ね || 完了（強意）の助動詞「ぬ」の命令形

a は、直前の「給は」が四段活用動詞「給ふ」の未然形であるから、打消の助動詞「ず」の連体形である。  
 c は、直前の「そむき」が四段活用動詞「そむく（背く）」の連用形であるから、完了の助動詞「ぬ」の終止形である。下に「らむ」があるので強意と考えてもよい。

d は、直前の「給ひ」が四段活用動詞「給ふ」の連用形であるから、完了の助動詞「ぬ」の命令形である。  
 e は、直前の「なら」が断定の助動詞「なり」の未然形であるから、打消の助動詞「ず」の連体形である。

波線部 **b** は「に」であるが、助動詞で「に」になるのは次の通り。

「に」↓ ・完了の助動詞「ぬ」の連用形。

※連用形に接続する。

※「くにき・くにけり・くにたり・くにけむ」の形で使われていることが多い。

・断定の助動詞「なり」の連用形。

※体言や連体形に接続する。

※ほぼ次の二つのパターンでしか使われない。

(1) 後方に「あり・侍り・おはす」等、物や人の存在を表す動詞を伴い、「に」自体が「で」と訳せる場合。

例 それは、わが兄にやあらむ。

(それは、私の兄であろうか。)

(2) 「にて・にして」の状態で使われていて、その部分が「であつて」と訳せる場合。

例 それは我が兄にて、太郎といふ者なり。

(それは私の兄であつて、太郎という者である。)

**b** は、体言に接続しており、存在を示す動詞「あら」を伴い、「**に**にやあらむ」は「**に**であろうか」と訳せるので、断定の助動詞「なり」の連用形である。

以上から、**a**と**e**は打消、**b**は断定、**c**と**d**は完了である。よって、正解は⑤である。

正解 24 ⑤

問3 内容説明の問題 基礎

傍線部A「御心地」とあるが、その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Aの直前にある「いと／あはれなる／人／を／見／つる／かな、尼／なら／ず／は、／見／で／は／え／やむ／まじき」は、「たいそうしみじみとする人を見てしまったものだよ、尼でなかったら、逢わずにすまずことはできそうにない」という意味である。「つる」は、完了の助動詞「つ」の連体形。「かな」は、詠嘆の終助詞。「なら」は、断定の助動詞「なり」の未然形。「ずは」は、打消の仮定条件（もしくはないならば）を表す表現。「で」は、「くしないで・くしなくて」と訳す打消の接続助詞。「え」は、打消表現（ここでは「まじき」と呼応して不可能（くできない）を表す呼応の副詞。「やむ（止む）」は、現在でも「雨がやむ・痛みがやむ」などと使う動詞だが、古文では「そのままにする・それきりになる」の意で使われることが多い動詞。「まじき」は、打消推量（くしないだろう・くしそうにない）の助動詞「まじ」の連体形である。

ここで言っている「いとあはれなる人」とは「見つる」の対象であり、「尼ならずは」という仮定で述べられている人であるから、実際には「尼」である人、つまり、菊君が透垣越しに覗き見た、「年のほど、二十ばかりと見え」て、「これも尼にやあらむ」と見た「あてにらうたげ」な若い尼である。菊君は、この若い尼を「いとあはれなる人」と思い、「見ではえやむまじき（＝逢わずにすまずことはできそうにない）」と思っているのであるから、この若い尼に心ひかれ、俗人と交渉を断っている尼であるから無理やり押しかけて逢うこともできないが、尼でなかったら、「逢わずにすまず」とはできそうにない」と思っているのである。つまり、傍線部A「御心地」は、菊君の、若い尼に対する恋心を言っているのである。

よって、正解は②である。

そもそも、「御心地」の「御」は、基本的に尊敬の意を示す接頭語であるが、本文冒頭から敬意が払われているのは菊君だけである。つまり、「御心地」は菊君の心なのである。藏人の心として説明している③・④や、老尼の心として説明している⑤は、それだけで誤りである。また、貴公子が美しい女性を垣間見るといふのは、物語の世界では典型的な恋の発端である。第二段落で菊君が隣の若い尼を覗き見た時点で、この尼に対する恋心が菊君に芽生えたのだと見るべきである。恋心以外の単なる好奇心（①）で見ていたのではない。菊君の心であり、恋心であるのだから、「菊君の恋心」と説明している②が正解であることは、傍線部直前の意味をとるまでもなく明らかである。

正解 ②

25

問4 内容説明の問題 標準

傍線部B「眠たげにもてない給うて」とあるが、その説明として最も適当なものを選べ。

「眠たげに／もてない／給うて」そのものは、「眠たそうに振るまいなさって」であるが、直前部、「君／は／かの／御返し／の／いと／ゆかしき／に、／あやにくなる／人しげさ／を／わびしう／思せ／ば、」は、「菊君は例の（手紙の）御返事がたいそう見たいが、あいにくな人の多さをつらくお思いになるので」という意味で、ここが「ゝので」と、傍線部Bの理由説明になっている。そして、続く次の段落冒頭の「からうじて／童／の／帰り／参り／たれ／ば、／『いかに／ぞ』／と／問ひ／給ふ／に」に、「やっと（隣へ使いに行った）少年が帰って参りましたので、（菊君が）『どうだったか』とお尋ねになると」とある。

「ゆかしき」は、「ゝしたい・心ひかれる」の意の形容詞「ゆかし」の連体形。「あやにくなる」は、「あいにくだ・折が悪い・意地が悪い」などと訳す形容動詞「あやにくなり」の連体形。「人しげさ」は、名詞「人」に、「多い・絶え間ない・茂っている」などの意の形容詞「しげし（繁し・茂し）」が名詞化した「しげさ」が付いた語で、「人の多さ」の意。「わびしう」は、「つらい・苦しい・寂しい・興ざめた」などの意の形容詞「わびし」の連用形「わびしく」の語尾がウ音便化した状態。「思せ」は、「お思いになる」の意の尊敬語「思す」の已然形。「もてない」は、「扱う・振る舞う」の意の四段活用動詞「もてなす」の連用形「もてなし」の語尾がイ音便化した状態。「童（わらは）」は、一般に「子供」のことだが、「召し使いである子供」の意であることも多く、ここでもその意である。ちなみに、年齢に関係なく「（身分の低い）召し使い」の意で使われることもある。

つまり、菊君は少年に命じて隣の家に持って行かせ、少年が返事をもたらしてくるのを待っており、もらってきたらすぐにでも手紙の返事を見たいのであるが、あまりに周りに人が多くてはばかられたので、人々を去らせようとして、「眠たげに」して見せたのである。

よって、正解は②である。

①の「蔵人たちがそうした菊君の行動を警戒して」、③の「こっそり蔵人の屋敷を抜け出して娘のもとに忍び込もうと考えた」、④の「突然やって来た自分を接待するために一所懸命なのだろうと察し、早く解放してあげようと気を利かせて」、⑤の「慣れない他人の家にいることで気疲れをしていた」・「早く眠りにつきたいということを伝えようとした」は、いずれも本文にこれらに相当する箇所がない。

正解 ②

26

問5 和歌の内容説明の問題 標準

X・Yの和歌に関する説明として最も適当なものを選び。

Xの和歌「露／かかる／心／も／はかな／たそかれ／に／ほの見／し／宿／の／花／の／夕顔」は、「(涙のような)露が降りかかる心もはかなくとりとめない。たそがれ時にほのかに見た家に咲く花である夕顔(のような美しいあなた)よ」という意味である。「露」は、「命・人生」などはかなくものを象徴することが多いが、涙のたとえとして用いられることもある。「はかな」は、形容詞「はかなし」の語幹。語幹だけを用いて強調する用法である。「たそかれ」は、「夕暮れ時」のこと。「ほの見」は、「ほのかに見る・ちらっと見る」の意の「ほの見る」の連用形。「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。「宿」は、「家」のことである。

菊君が「たそかれにほの見」たのは実際には若い尼であるから、「夕顔」の花は若い尼のたとえであると考えべきである。とすれば、「露かかる心」は、はかなく感じられる恋心を抱いて涙がちである菊君の心を言っていることがわかるだろう。

よって、Xの和歌に関する説明では大きな誤りがある選択肢はないことになる。

Yの和歌「世／を／そむく／葎／の／宿／の／あやしき／に／見／し／や／いかなる／花／の／夕顔」は、「(我が家は)俗世を捨てて(出家した者が住んで)いる葎の生い茂った家で粗末な家であるのにどのような夕顔の花を見たというのですか」という意味である。「世をそむく(世を背く)」は、「俗世を捨てて出家する」の意。「世を捨つ・世を逃る・世を厭う(いとう)・世を出づ」なども同意であるので覚えておきたい。「葎(むぐら)」は、(注)にあるとおり、つる草の一種で、隣家がつる草が生い茂るような質素な住まいであることを表している。「あやしき」は、問1(ウ)でも見たように、物に対して使う時には「みすばらしい・粗末だ」人物に対して使う時には「身分が低い・卑しい」、気分や様子に対して使う時には「不思議だ」と訳す形容詞「あやし」の連体形だが、ここは「宿(家)」について言っているのであるから「みすばらしい・粗末だ」の意。「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。「や」は、疑問の係助詞である。「見しやいかなる花の夕顔」は、「見たかどんな花の夕顔を」と直訳される箇所であるが、目的語と述語の倒置を戻すと「どんな夕顔の花を見たのか」と言っていることになる。要は、「粗末な家なのにあなたはどんな夕顔の花を見たのか、そんな華やかな花はどこにもない」と言っているのであり、「夕顔」が若い尼のたとえであることを考えると、「あなたが見たという女性などここにはいない」と言っていることになる。

よって、Yの和歌に関する説明が正しいのは④である。④以外の選択肢のYの和歌に関する説明は和歌の表現に照らし合わせて見ると合致しないものばかりである。⑤の「いったい誰のことを指しているのか分からない」は誤りではないが、⑤は「この家には若い女性は何人かいる」が和歌の

内容に合致しない。

以上から、正解は④である。

正解 27 ④

問6 登場人物に関する説明問題 標準

この文章の登場人物に関する説明として最も適当なものを選べ。

「登場人物に関する説明」という設問は新形式であるが、実質的には例年の問6同様、本文全体を見渡す合致問題である。

正解である①は、傍線部Aの直後「人なきひまに御前にさぶらふ童に問ひ給ふ」から、Xの和歌の次の行にある「童は心も得ず、あるやうあらむと思ひて、懐に入れて行きぬ」に相当していて誤りが無い。選択肢の「きょうだい」は本文中の「はらから」(30ページ13行目)、「気位が高い」は「思ひ上がりたる」(同16行目)、「真意をはかりかねた」は「心も得ず」(31ページ5行目)、「何かわけ」は「あるやう」(同5行目)に相当する。

②は、後半の「出家した女性を恋い慕うことに対して罪の意識を強く感じた」それも許されるだろうと考えて「が本文にない」。

③は、「連絡もなくやって来たことには不満を感じていた」と「食事に手も付けない菊君の態度を目にしますます不快に思った」菊君をあわれだと思つた」が本文にない。30ページ14行目で召し使いの少年が「君のかくにはかに渡らせ給ひたる、折悪しとて、主はいみじうむつかり侍る」と言っているが、これは「菊君様がこのように急においでになった時に、(老尼親子がやって来ていることは)折の悪いことだと、主はたいそうわずらわしいことに思っております」という意味であり、藏人が菊君の訪問を不快に思っているということではない。藏人は菊君の訪問をひたすら「かたじけなき御座(畏れ多いお出まし)」(30ページ1行目)と思ひ、従者たちとともに懸命に菊君をもてなそうとしているのである。

④は、最後の「菊君に娘の姿を見られてしまったので、藏人に間の悪さを責められた」が誤り。本文には、③でも見たとおり「君のかくにはかに渡らせ給ひたる、折悪しとて、主はいみじうむつかり侍る」(30ページ14行目)とあるだけである。娘を見られた後に、藏人が老尼を責めたとは書かれていない。

⑤は、まず「落ちぶれたことによつて」が本文にない。また、「藏人の屋敷で」は本文と合致しない。老尼と娘がいるのは藏人の家の隣の家である。さらに、「老尼の娘」が「歌を贈られたこと」で心を乱し、眠れなくなった」も誤り。菊君のXの和歌を見た老尼がYの和歌で「ここにはあなたの思う

女性はいない」と返歌しているのであり、菊君の歌は娘には届いていないのである。また、「寝られ給はず」（31ページ12～13行目）とはあるが、この主体は菊君であって老尼の娘ではない。

正解

28

①

## 第4問 漢文

新井白石 『白石先生遺文』

## 「書き下し文」

雷霆を百里の外に聴けば、盆を鼓するがごとく、江河を千里の間に望めば、帯を縈ふがごときは、其の相ひ去るの遠きを以てなり。故に千載の下に居りて之を千載の上にも求むるに、相ひ去るの遠きを以て其の變有るを知らざれば、則ち猶ほ舟に刻みて劍を求むるがごとし。今の求むる所は、往者の失ふ所に非ざるも、其の刻みしは此に在り、是れ從りて墮つる所なりと謂へり。豈に惑ひならずや。

今夫れ江戸は、世の稱する所の名都大邑、冠蓋の集まる所、舟車の湊まる所にして、実に天下の大都会たるなり。而れども其の地の名たる、之を古に訪ぬるも、未だ之を聞かず。豈に古今相ひ去ること日に遠く、事物の變も亦た其の間に在るに非ずや。蓋し知る、後の今に於けるも、世の相ひ去ること愈遠く、事の相ひ變ずること愈多く、其の聞かんと欲する所を求むるも得べからざること、亦た猶ほ今の古に於けるがごときを。

吾窃に焉に感ずる有り。『遺聞』の書、由りて作る所なり。

## 「通釈」

雷鳴も百里も離れたところで聞くと、盆を叩いているくらい（の小さな音）に聞こえ、（長江や黄河のような）大きな川も千里も隔てたところで眺めると、身にまとっている帯くらい（の長さや幅）に見えるのは、遠く離れたところから見聞きしているからである。それゆえ（それは距離だけでなく時間についても同様で）、現在の時点から遠い過去のことを知ろうとしても、長い時間がたっているために（その間に事物が）変化していることを知らない、あなたも「舟に刻みて劍を求む」（という故事）のようなことになる。今（劍を）探しているところは、（舟はすでに動いているのだから）先刻（劍を）なくしたところではないのに、舟べりに刻んだ目印はここなのだから、ここが（劍が）落ちたところだと思っている。（それと同じで、現在から過去を知ろうとしても、長い時間の隔たりの中で、わからなくなっていることが多い。それに気づかないのは）なんと愚かなことではないだろうか。

今、そもそも江戸は、世に称えるところの有名な大きな都市で、身分の高い人々が集まるところで、水陸の交通の要衝であって、まことに天下の大都會である。しかし、（今はこれだけの大都市も）その（江戸という）土地の名を、古い記録や書物の中に探しても、見つからない。（つまり、江戸は昔から繁華だったわけではないのであって、それは）なんと昔から今に至るまでに長い時間が流れ、その間にまた事物も（大きく）変化しているということではなからうか。そう考えると、未来と現在についても（同じことが言えるであろうから）、時間はいつそう遠く隔たり、（その間の）事物の変化もいつそう多くなって、（未来から振り返って現在のことを）知りたいと思うことをさくつてもわからなくなっているであろうことは、ちょうど現在と過去（つまり、今、昔のことがわからなくなっているの）と同じであろう。

私は内心このことに感ずるところがあつて、(後世の人々のために、今の江戸の姿を記しとどめておきたいと思い)この『江関遺聞』の書を作つたのである。

「解説」

問1 語の読みの問題 (ア) 基礎 (イ) 基礎

波線部(ア)「蓋」、(イ)「愈」のここでの読み方として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

読みの問題は、二〇一五年度に、「将」と同じ読み方をする「且」、「自」と同じ読み方をする「従」を選ぶという形で出ているが、二カ所の読み方をそれぞれの選択肢から選ぶという形は、二〇〇八年度以来、久しぶりの出題である。

(ア)「蓋」は、「けだし」で、「思うに」。考えるに「の意である。①の「蓋」(再読文字「なんぞ…ざる」)と間違いやすいので注意したい。

①「なんぞ」は、「蓋」もそうであるが、ふつうに疑問詞ならば、「何・胡・曷・庸・奚」など。

②「はたして」は、「果」。

③「まさに」は、「方・正・適」。あるいは、再読文字「将・且・当・応」の一度めの読み。

④「すなはち」は、「則・乃・即・便・輒」。例は少ないが「曾・而・載・迺・就」なども「すなはち」と読むことがある。

(イ)「愈」は、「いよいよ」で、「いっそう。ますます」の意。「逾・兪・弥」も同じである。

①「しばしば」は、「数・屢」。「いよいよ」や「しばしば」のような読み方をする語を「疊語」といい、「おのおの(各)」「ますます(益)」「もそうであるが、」たまたま(偶・会・適)」「そもそも(抑)」「こもこも(交・更)」などは覚えておきたい。

③「かへつて」は、「却・反」。

④「はなはだ」は、「甚・苦・太・已・孔」。

⑤「すこぶる」は、「頗」。

正解 (ア) 29 ⑤ (イ) 30 ②

問2

語句の意味の問題

- (1) 標準 (2) 標準

傍線部(1)「千載之上」・(2)「舟車之所湊」のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

(1)「千載之上」は、「千載」が「遠い年月」のことを表す語であるという知識があれば、②の「遠い過去」か、⑤の「はるかな未来」、つまり、時間を表している選択肢に絞ることができる。そうでなくても、①「地位」、③「積み荷」、④「書籍」のような語でないことは、文脈上わかるであろう。

「千載の下に居りて、之を千載の上」に求むるに」という対比がある。「上・下」が何を言っているのかであるが、「下に居りて」と言う以上、「千載の下」は、遠い年月が上から下へ流れついて、今「いる」所、つまり「現在」を言っているであろう。すると、「千載の上」は、遠い年月をさかのぼった「過去」のことである。このあとの「舟に刻みて剣を求む」の故事が、「往者(過去)」に落とした剣を、すでに舟が進んでしまった「今」求めているという話であることから、「現在」の時点から「過去」のことを……と見なければならぬ。

(2)「舟車之所湊」も、「舟車」が「水陸の交通機関」であるという知識があれば、あるいは類推ができれば、それが「湊まる所」なのであるから、③の「水陸の交通の要衝」にたどりつけるであろう。

これも、①「軍勢」、②「港」「湊」は「みなと」とも読むが、ここでは動詞「あつまる」である、④「事故」「難所」、⑤「居住区」などを不適切な選択肢として消去することは容易である。

- 正解 (1) 31 (2) 32 (3)

問3

傍線部の内容説明の問題

標準

傍線部A「聽雷霆於百里之外者、如鼓盆、望江河於千里之間者、如繫帶、以其相去之遠也」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

内容説明であるから、まずは、傍線部そのものの解釈ができることが大切である。

「雷霆を百里の外に聴けば、盆を鼓するがごとく」

雷鳴(注1)のように大きくとどろくような音でも、百里も遠く離れたところで聞くと、盆(注2…酒などを入れる容器…円形で浅い瓦器…日本で

言う「おぼん」とは違うが、似たようなものを想像しても可）を叩いたくらいの小さな音に聞こえる、ということを行っている。

「江河を千里の間に望めば、帯を繫まふがこときは」

「雷霆」の聴覚に対して、ここは視覚であるが、言いたいことは同じである。「江河」は、中国の長江ちやんぎやうと黄河くわがのことを言うが、ここでは「大河（大きな川）」のこと。大きな川も、千里も隔てたところで眺めると、身にまとう帯おびくらいの長さや幅に見える、ということである。

「其その相あひ去あるの遠ときを以もてなり」

その隔たっている距離が遠い、つまり、遠く離れたところから見たり聞いたりしているからである、と。

この内容をカバーしているのは、②である。

①は、「聴覚と視覚とは別の感覚」なので違いがあり、一方は「百里」、一方は「千里」離れて「小さく感じられるようになる」としている点が間違まちがい。「百里」「千里」はいずれも「遠い距離」を言っているだけで、十倍の距離ということを言っているのではない。

③は、「百里」と「千里」の離れ具合で、「どのくらい小さく感じるかの程度ちゆうどが違ちがってくる」としている点が間違まちがいである。

④は、「…おかげで」「危険なものも」「怖こくなくなる」が間違まちがっている。

⑤は、「空の高さと陸の広さとは違うので」「『江河』は『千里』でもまだ少しは見える」が間違まちがっている。

正解 33 ②

問4 故事をふまえた、傍線部の理由説明の問題 応用

傍線部B「豈あ不ま惑ま乎」とあるが、筆者がそのように述べる理由は何か。「刻せ舟ふね求もと劍けん」の故事に即した説明として最も適当なものを一つ選べ。

「豈あに惑まひまならずや」は、「なんと愚かなことではないか」という意味である。「豈あ不ま…乎や（あに…ずや）」は「なんと…ではないか」という詠嘆の形。設問に「『刻せ舟ふね求もと劍けん』の故事に即した説明として最も適当なものを」とあり、選択肢も、「舟ふねに刻せみて劍けんを求もとむ」の故事にうかがえる「愚かさ」の理由説明になっている。

「舟ふねに刻せみて劍けんを求もとむ」については、注3に、「船で川を渡る途中、水中に劍を落とした人が、すぐ船べりに傷をつけ、船が停泊してからそれを目印に劍を探した故事」と、詳しい説明がある。

しかも、本文中にも、傍線部Bの直前で、「今の求むる所は、往者失わしやふ所ところに非あざるも、其その刻せみましこは此こゝに在あり、是これ従よりて墮おつる所ところなりと謂いへり

(「今自分が剣を探しているところは、過去に剣をなくしたところではないのに、目印をつけたのはここなのだから、ここが剣が落ちたところだと思っっている」とあり、それが「愚か」だと言っているのである。この点を説明できているのは④である。

- ①は、「剣は水中でどンドン錆びていくのに」が間違い。
- ②は判断が難しいが、「どれくらいの距離を移動したかを調べもせずに」が余計である。
- ③は、全文間違いである。「目印のつけ方」の問題ではないし、それを「議論」してもいない。
- ⑤は、「それに応じて新しい目印をつけるべき」「忘れてそれをしなかった」が間違いである。

正解 34 ④

問5 返り点の付け方と書き下し文の組合せの問題 標準

傍線部C「其地之為名、訪之於古、未之聞」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを一つ選べ。

この形の問題は、センター漢文ではよく出るのであるが、返り点の付け方の判断は関係ない、あくまで読み方(書き下し文)の問題である。句法上のポイントがあつて、その読み方の正否で絞れるケースもあるが、絞りきれない場合は、そのように読んだときの文意が通るのか、文脈にあてはまるのかの判断になる。

「其地之為名」の部分には、2対2対1の配分がある。

- ①・③は「其の地の名を為すに」(その土地が名をなすにあたって)
- ②・⑤は「其の地の名為る」(その土地の名であるものを)
- ④は「其の地の名の為に」(その土地の名ののために)

選択肢の冒頭部の配分が2対2対1で、1(この場合は④)が正解となる可能性は小さい。

「訪之於古」の部分にも、2対2対1の配分がある。

- ①は「之を訪ぬるに古に於いてするは」(これを探すのに昔においてするのは)
- ②・⑤は「之を古に訪ぬるも」(これを昔に探しても)
- ③・④は「之きて古に於いて訪ぬるも」(行って昔において探しても)

昔に「之」くことは当然できないことであるから、「之」を「ゆく」と読んで③・④は疑問がある。②・⑤は、ここまでは同じになっている。その土地の名であるもの（＝江戸という名）を、昔（の記録や書物など）に探しても」というような意味になって、ここまでの意味としては、②・⑤でよいように見える。

「未之聞」にも、2対2対1の配分がある。

①は「未だ之くを聞かず」（まだ行くのを聞いたことがない）

②・④は「未だ之を聞かず」（まだこれを聞いたことがない）

③・⑤は「未だ之かざるを聞く」（まだ行かないのを聞く）

③・⑤のような読み方をするには、「聞未之」の語順でなくてはならず、ここも、①・③・⑤のように「之」を「ゆく」と読んで、文脈にあてはまらない。この三つめの部分は、明らかに、②・④の読み方が適当といえる。この部分から先に絞ってゆくと、正解にたどりつくのも早い。「江戸」という名は、昔の記録（書物）には見られないということを言っているのである。

正解

35

②

#### 問6

傍線部の理由説明の問題

応用

傍線部D「『遺聞』之書、所由作也」とあるが、『江関遺聞』が書かれた理由として最も適当なものを一つ選べ。

傍線部Dの直前にある、「吾窃かに焉に感ずる有り」の「焉」に着眼したい。「私は内心このことに感ずるところがあつて」この『江関遺聞』を書いたと言っているのである。

「焉」の内容は、前段落の末尾にある。

「蓋し知る、後の今に於けるも、世の相ひ去ること愈遠く、事の相ひ変ずること愈多く、其の間かんと欲する所を求むるも得べからざること、亦た猶ほ今の古に於けるがこときを」。

第一段落でも、現在の時点で遠い過去のことを知ろうとしても、長い時間が流れ、事物はその間に変化して、わからなくなってゆく、ということが述べられていた。そして、第二段落では、現在これほどに繁華な大都会になっている江戸も、過去にはどうだったかわからないと述べている。現在から見て過去のことかさほどにあいまいなのだとすると、現在が過去になる「未来」から見たら、やはり現在のことなど遠くあいまいなものになるので

あろう。

「そう考えると、未来と現在についても、時間はいつそう遠く隔たり、その間の事物の変化もいつそう多くなって、（未来から見て現在のことを）知りたいと思うことをさぐってもわからなくなっているであろうことは、ちょうど現在と過去の関係と同じであろう」、それゆえ、この『江関遺聞』に今の江戸のことを記して、後世の人々に今のことがわかってもらえるようにしたいと思って、この書を作ったと言っているのである。

①が正解。

②は、「政治的・経済的な中心」は、「冠蓋の集まる所、舟車の湊まる所」をそれと見ることもできるが、はっきり言っていないので△。「今後も発展を続ける保証はないし、逆にさびれてしまうおそれさえあるので、これからの変化に備えて」も間違い。本文にない。

③も、「経済面」「政治的にも」が△。「江戸の今と昔とを対比することで」以下も、全体が本文の内容とはズレている。

④は、「古い情報しか持たずに遠方からやってきた人は」以下、全文が間違い。最新の江戸案内の本を書こうとしたのではない。

⑤は、江戸の「風情」をポイントにしている点で、全文が間違いである。

正解

36

①